

武隈の松 松隈義勇

——『おくのほそ道』の一風景 「桜より」の句——

仙台滞在中の一日。東北本線の上りに乗って四つ目の駅の岩沼で下車した。歌枕の「武隈の二木の松」を見ようがためである。朝から重い曇り空だったが、外に出るとあいにくぼつぼつときて、それもだんだんひどくなるけはいである。用意の傘をさした。

地図で大体の見当をつけておいたので、駅前から裏通りづたいに歩く。小学校の横手を通って、約十分もたったと思う辺から、その二木の松は丈の高い美しい姿を人家の上に現した。足を早めて近づくと、自動車の往來がやつとできそうな幅の道路の一角を占めて、百年以上を経たということで、かなり大きな松だ。二つの木が身を寄せ合って、堂々たる威容を雨空にそそり立たせている。皎々たる秋月の下で心ゆくまで仰ぎ見たいなという思いがふと心をよぎった。土際の根もとから二本に分れたと解説書などにはあるが、むしろ二株の松が相寄って根もと近くでくっついたというに近い特異な形相である。路上にあるその根元が朱塗りの四角な木柵で囲まれていて、柵中に「二木松碑」として、次の二首の古歌が刻してある。

うゑしときちぎりやしけむたけくまの

松をふたたびあひ見つるかな

藤原元良

たけくまの松は二木をみやこ人

いづくと問はばみきとこたへむ

橘季通

また、柵外に松の由来を記した標示板が立ててある。

松の背後は閑静な人家の塀になっている。前の道路をはさんだ反対側には農業用の倉庫か小工場といった風体の建物がある。私はその軒先に身を縮め雨を避けながら、カメラのシャッターを切った。通行人もない。

今の松は植え継がれて七代目ということだが、古い歌枕旧蹟である名松が、昔の姿を伝えてこうして眼前にあるということは、芭蕉ならずとも感動感激に値することといわねばなるまい。

武隈というのは岩沼地方の古い地名だそうだが、武隈の松についての文献上の初見は、(註)金沢規雄氏によれば、『後運和歌集』の「雑三」にある、「みちのくにの守にまかり下れりけるに、たけくまの松の枯れて侍りけるを見て、小松を植ゑつがせ侍りて、任果てて後又同じ時にまかりなりて、かの先の任に植ゑし松を見侍りて」という詞書を持つ、歌碑に掲げる第一首だという。名は和歌集中の「元善」に従いたい。この歌は「松」に「待つ」を掛け、その「待つ」

と「契り」と「ふたたびあひ見る」という、恋に関わる三つの縁語をあやなして仕立ててあるが、二木の松は元來は対になった二株で夫婦松だったと思われるから、まさにふさわしい縁語というところか。(なお「たけくま」の「たけく」には立派なという意味があるからそれにも掛けて用いてあるとも見られる。)

この歌に次いで、藤原実方みかたの「みちのくにほど遠ければたけくまの松まつ程ぞ久しかりける」などがある。また「後拾遺集」には、歌碑にある橘季通すももの歌と共に、能因法師の、「みちの国に二度下りて、後のたび、武隈の松もはべらざりければ、詠みはべる」という詞書のある「武隈の松はこのたび跡もなし千歳をへてや我は来つらむ」が出ている。同集にある季通の歌は「武隈の松はふた木をみやこ人いかと問はばみきとこたへん」とあって、第四句が歌碑の形とは違うが、この方がよい。「松」「待つ」の掛詞があり、「待つ」に対して「見き」が縁語になる。「見き」は平安語では男女が相逢い婚したという意がある。「みき」には更に「三木」(二木に対応する縁語)と「幹」(松の縁語)が掛けられている。手込んだ洒落しやうらくを弄した歌だが、そこが喜ばれたらしい。

更に降くだっては、西行の『山家集』に「武隈の松も昔になりたりけれども、跡をだにとて見に罷りて詠みける」という詞書を伴う「枯れにける松なき跡の武隈はみきと言ひても甲斐かひなかるべし」がある。季通歌を本歌とした掛詞・縁語仕立てで(「枯れ」「離れ」の掛詞もある)、西行を待つまでもない歌だが、武隈の松を詠むには、「松」「待つ」の掛詞と「見き」という縁語を用いるというパターンが規範として出来上っていたことがこれでもわかる。

『類字名所和歌集』には「武隈」の項に十四首が載せられ、『松

葉名所和歌集』には別の歌十七首が載せられている。因みに『平安和歌歌枕地名索引』所載の歌数は四十五首の多きにのぼる。「白河の関」の五十五音に比べても決して少なくない数であって、奥州の歌枕として重きをなしていたことを物語っている。

藤原清輔の『奥義抄』には、武隈の松は藤原元善が初めて役所に前に植えたもので(事實はその以前から既にあったことが『後撰集』の詞書で知られるが)、その後焼けたり枯れたりして植え継がれたが、陸奥守孝義が切って橋の杭にしてしまって、それ以来は絶えたという伝承が書かれている。そして付言して「なくともよむべし」、即ちたとえ松は無くなってもあるもののように歌を詠めと教示している。歌枕とはそうしたものだらう。

一時廃絶した二木の松もやがて又心ある人によって植え継がれて、芭蕉が来た時は五代目だったということだが、それは文化年間まで健在だったそうで、立派な姿をした松だったらしい。

芭蕉の『おくのほそ道』中の次のくだりは右に述べたような文学伝統の積み重ねを踏まえて構成された文章である。

武隈の松にこそめ覺る心地はすれ。根は土際より二木にわか
れて、昔のすがたうしなはずとしらる。先、能因法師思ひ出
往昔むかし、むつのかみにて下りし人、此木を伐て名取川の橋杭にせ
られたる事などあればにや、「松は此たび跡もなし」とは詠た
り。代々あるは伐、あるひは植継などせしと聞に、今将千歳ちとせの
かたちととのほひて、めでたき松のけしきになん侍し。

「武隈の松見せ申せ遅桜」と学白まなしろと云ものの餞別はなわかれしたりければ、

桜より松は二木を三月越たき

「松は此たび跡もなし」は能因和歌の一節を引用したものが、「千歳のかたち」という一語にも能因の歌が踏まえられている。そして「千歳」は伝統的な松の縁語である。

挙白の句は意味のわかりにくい句で、上・中の十二文字が誰に対する命令ないし呼びかけか、座五の「遅桜」が詠吟の折の眼前にあるものか、奥州の遅桜を予想しているのか。呼びかけではなくて、眼前曠目の景物として取合せのために置いたものなのか。古注・新注、注はそれこそいろいろに分かれているが、まず虚心に読んでみたところでは取合せとするのは無理なようだ。取合せの景物とする、「見せ申せ」と言いかける相手が不明になるし、その上にその呼びかけの内容と遅桜とを取合せの根拠がぼやけている。これは眼前の遅桜に対して呼びかけたものと解すべきである。擬人法の手法で、松への道案内をせよ、あるいは松の存在を標示せよと言っている。そこに俳諧があるのである。そこには桜花と同類で（自然美を表す樹木という点で）、しかも花より以上すばらしい（文学伝統に装われている）武隈の松だからという賞美の気持ちがあると思われる。この遅桜は眼前にあるものだが、同時に季節的に遅く咲くであろう（芭蕉翁の来訪される頃に咲いているであろう）奥州路の桜もダブルイメージになっていると考え、一層面白いし、よくわかってもらえる。

なお「松」に「待つ」を掛けて、翁のおいでを待っている武隈の松といつているともとれる。又「見せ申せ」の「見」は、例の武隈の松を詠むパターンで「見き」を意識に置いた措辞かも知れない。そうだとすれば、芭蕉はこれに心える挨拶として「見き」と言い返

さねばならないわけで、それも予期されていると考えられる。恋に寄せて、恋路の手引をしてあげよと戯れているそぶりも見える。

芭蕉の「桜より」の句は、その挙白の錢別句に対する返してある。挙白が編した『四季千句』所載の芭蕉の句文では「武蔵野は桜のうちになれ出で、武隈はあやめぶく比よになりぬ。かの松見せ申せ遅桜と云ひけむ、挙白なにがしの名残も思ひ出で、なつかしきまに」と前書して、「散りうせぬ松や二木を三月越し」という形で出ている。この句形が初案であろう。「散りうせぬ」とは桜は忽ちに散ってしまうが松は常緑で命長いと松を賞美した気持である。季は「松葉散る」の因みで夏と見られる。それを成案のように「桜より」と改められると、「桜より……三月越し」という文構成になり明白な、季語はないが、計算で夏（雑）の句となる。「桜より」という語は、「より」が起点を示す助詞だから桜の季節から（待つた）という意味だが、それだけでなく、桜の頃から今まで待つというわけで、裏には松のように散りうせぬがゆえに桜よりすばらしいという、ほめる心をほめかしていると思える。「より」を比較を示す助詞と解する説もあるが、桜と松とを何について比較するかが明らかでなくなるし、掛詞の「待つ」が生きてこない。近來の卓抜の注釈である尾形叡氏の「おくのほそ道注解」（「解釈と鑑賞」昭四〇・一一号）は「待つ」の掛詞を否定して、「より」を比較の用法としていられるが、「待つ」の掛詞は伝統的なものだから、やはり通説に従っておきたいと思う。

さてこの句は、橘季通の歌の「武隈の松は二木をみやこ人みやこの傍点部分をそっくりそのまま裁ち入れたわけだが、「み」から「三月越し」へと翻してもって行って、そこに「見る」を掛けたのであ

る。なお尾形氏の「注解」では「見つ」が掛けてあるとされる。

(その他にもこの説を探る人はかなりある) 私は本歌(季通歌)が本歌だから「見つ」ではなくて「見き」とありたい所だという考えを捨てきれない。そこであながちに異を立てたみたいな考えだが申し述べてみたい。思うに、「三月」には「三つ木」が句わしてあるのではないか。その「三つ木」を「三木」と読み取ることは、本歌を熟知していた芭蕉周辺の人々なら敏く機知を働かし得るはずである。そして「三木」「幹」「見き」の掛詞も感得し得たろう。あらわに指摘するとなると穿ち過ぎになるだろうが、隱微の間の感受のようなものの匂いとしてならば十分あり得ると思われる。ただ表面上の掛詞は「見」だけに止めておくのが穏当だろう。

それから挙白の餞別句に恋が句わしてあると見た場合には、恋い焦れて待っていた二木の松、美しい桜花よりもすばらしいあの名松に、三月越して首尾よく逢うことができたというふうに、眷恋の心を匂わしてあると受取ることができよう。そんな艶かしさをも秘めた句なのである。

このことは挙白に対する挨拶として美事に感謝の気持を表すと同時に、又和歌の伝統や歌枕(武隈の松)並びに故人に対しても美事に挨拶を送りつつ、その道の跡を辿る者としての誠意を表したことになるのである。そういう複雑な内容を表すためには縁語・掛詞などの技巧が最も効果的だったのである。

『おくのほそ道』中の芭蕉発句のうち、こうした和歌的技巧を駆使したものは、約十句ばかりある(この旅を終った後には急速に減じている)。そのうちで最も和歌的な技法に富むと思われるのが「桜より」の句であり、その他では直ぐ前にある「笠嶋はいづこ五

月のぬかり道」、信夫の里の「早苗とる手もとや昔しのぶ摺」、平泉の「五月雨のふり残してや光堂」などが目に着く。心を古い世界へ向けた場合が多いようである。

歌枕や古歌・古典に関係のある物事について詠まれた、心を古い方へ向けて発想された句における古典語なかんずく掛詞や縁語は、内容以上にその言語そのもの、技法そのものが既に伝統的な和歌世界へ結び付く傾向を持っている。そしてそこにそれ独特の美——伝統的な美的世界の影向による——が現れる可能性を有している。もちろん、こうした技巧は俳諧の世界では、和歌のパロディとして、又俳諧的の機知、感興として機能することもあって、全部が全部そのように言えるとは限らないことはいうまでもないことだ。ここに取上げている「桜より」の句にしても、和歌のパロディとしての俳諧的滑稽の要素も否定しがたいが(紀行の地の文中で「簗輪笠島も五月雨の折にふれたり」と述べている姿勢がそれを示している)、しかし、ここでは和歌的伝統美に結び付く点を特に重視したのである。

「桜より」の句をもって、技巧を弄しただけの(それも過度に)句だとして貶する従来通例の評価は、近代の俳句に対する態度をもって量ったもので、右の点を看過したものと言わなければならない。確かにこの句は武隈の松の美事な姿を描写してもいいし、その他具体性のある何物をも、俳句的な即物性をもって表現してもいい。で、抽象的、観念的な叙述に終始している。しかし前述の通り武隈の松に関する古歌やその他の一般古歌の伝統的表現に注目するならば、一種独特の文芸美を具えていることに気付くのである。

つまりこの句は、和歌における本歌取りの手法を俳諧に試みても

のであり、掛詞・縁語の技法をも踏襲したものであって、この句は、本歌に当る季通の歌などを、単に踏まえたとか下敷きにしたとかいうだけでなくて、取入れ、包み込んだというべきなのである。そこにはそれらの古歌の美的世界へ志向する精神的緊張の美がまずあって、さらに又古歌の美的世界が光暈のように仄かに耀めき、浮き出てくるところに一種独特の美が生れてくることにもなる。こうした文芸美の存在するという重要なことをこの句は教えてくれる。

道順は逆になるが、武隈の松から南へ向い少し行つて、竹駒神社の横の参道から広い境内へ入った。竹駒は武隈の転であるうか。この神社は稲荷社で京都の伏見稲荷の系統を引く日本三大稲荷の一つと聞くが、うち見たところなかなか宏壮な堂々たる社である。背後あたりにはあるのかも知れないが、例の赤い鳥居のトンネルも見当らず、稲荷社という感じはまずない。本殿は修築中で、覆いをしたあちこちから雨水がぼたぼた落ちている。参拝をすましてから、立派な唐門の下にたたずんで、雨をよけながら写真をとった。

そばに土井晩翠の「竹駒の神のみやしろ詣で来て旋びそめし初桜みる」の歌碑があるが目に入った。それから池の汀の小石のように水びたしになっている玉砂利を踏んで「二木塚」と呼ばれる芭蕉句碑を探した。どしゃ降りの雨がうちかぶさってくる。表参道に向いている赤い大鳥居にほど近く、細長いその句碑はすぐ目に着いた。刻まれた文字は、

芭蕉翁 さくらより松は二木を三月越し

その右側にずんぐりとした句碑がある。寛政五年（芭蕉の百年忌）にその二木塚を建てた正風六世謙阿の句碑で、

臘より松は二夜の月にこそ

と刻んである。「桜より松は、二木を」の句に基いてその傍点部分をそのまま取入れた句作りとみえる。芭蕉句が季通歌を裁ち入れた手法を継いだのだろう。「松」「待つ」の掛詞もあると一応認めておきたい。「春の臘月の時から（秋まで）待って」というような意味合いだろうか。しかし一方「臘より……二夜の月にこそ」という文脈からすると、「二木の松は臘月に照られた姿よりは、二夜の月（旧曆八月十五夜と九月十三夜の月）の下でこそ見るべきだ」と解したくなる。「より」は起点を示すのか、比較の意なのか、微妙な所だ。両方に掛けてあるとも思われる。ただ芭蕉の句のように古歌に直接には拠っていないから、伝統美の厚みといったようなものは乏しいが、「桜より」の句よりはよほど具象的で、松の臘夜のイメージや月明下の姿を思い浮べさせる所がある。私は雨の二木の松を見上げながら、月下で仰ぎたいなと思っただが、はしなくも謙阿の句はそのイメージをよんでいるわけだ。

竹駒神社の表参道から国道四号線の商店の並ぶ大通りに出た。さてこれから予定ではバスを利用して北東方へ向い名取市愛島へ行くはずであった。愛島の笠島には平安中期の歌人でその地で没した藤原実方の墓とゆかりの道祖神社とがある。実方は清少納言などとの恋愛を取沙汰された風流貴公子だが、宮中で藤原行成と争ったことから陸奥守に貶せられてここに来て、道祖神社の前を馬乗のまま通ろうとして神の怒りにふれて落馬して死んだと伝えられる。西行はそのささやかな墓を見て哀れを催し一首詠じた。

朽ちもせぬその名ばかりをとどめおきて

枯野の薄形うすかたち見にぞ見る

(山家集)

実方の悲運の眞の理由はわからないが、和歌の名手を謳われる高貴の身分をもって異境へ流離したことによって、在原業平の流を継ぎ漂泊者の系譜に連る一人とみて、西行が格別の関心を寄せたのも理由のないことではない。その歌には榮枯盛衰のその亡びの哀れに對して無常を嘆く氣息がこめられている。これは芭蕉がみちのくの旅で感懐をこめて詠じた主題の一つ——「夏草や」や「荒海や」の句などに現れている——とまさに一つに重なるものであった。芭蕉がいかにその地を訪れて実方を弔ひ西行を偲びたかったか、想像に余りある所である。しかも芭蕉はついに行けなかった。「おくのほそ道」にはこう記してある。

笠嶋の郡に入れば、藤中将実方の塚はいづくのほどならんと人にとへば、是より遙右に見ゆる山際の里をみのわ笠嶋と云、道祖神の社かた見の薄今にありと教ゆ。此比の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら眺ながりて過るに、鑊輪笠嶋も五月雨の折にふれたりと、

笠嶋はいづこさ月のぬかり道

直接にその地を踏むより以上の切々の思いをかえて創造し得たともいえるだろう。笠嶋のくだりを記した句文はいくつも残されている。いかに彼がこれに心を寄せていたかがわかる。

「笠嶋は」の句は上半で和歌伝説の地なる笠嶋に強く引かれる氣持を表し、下半でその氣持の消されることを阻む現実を表している、その葛藤が一種の緊張關係をもたらしているし、五月雨に降りこめられる景情が旅情と共に沈められていて、佳吟たるを失わぬ。だが「笠」と「五月雨」との縁語が織り成す美も見のがすわけに

はいかない。それは一つには俳諧の洒落しよれの面白さであるが、又一つには五月雨がひどく降るのに笠も（箆も）見当らぬというニュアンスをかもし出して、旅情を深めている。更にそればかりでなく、やはり和歌の伝統的修辭に結び付く要素があつて、それが笠嶋に関わる和歌的懐古の心情とよく合致しているように思われる。

道順からすれば当然岩沼から北上して愛島（笠嶋）方面へと進まねばならぬわけなのに、どういう理由によるのか、『おくのほそ道』では笠嶋のことが先にあり武隈の松が後に叙してある。これについては説が多いし、私にも一つの考えがあるが、ここで述べる余裕がない。

実方の墓は幽寂な佳境だと聞いていたが、畑や竹林の中のどろんこ路を尋ね尋ね進る行かねばならない所らしいのだ。日もだんだん暮方に近づいて、雨はますます激しい。どう考えてもその探訪は無理との判断を下さざるを得ない。万斛の恨みを呑んで、私はやがて来た名取市内經由の仙台行きのバスに身を委ねた。

(注) 金沢規雄氏『「おくのほそ道」とその周辺』

〔付記〕前号に載せた「忍ぶのさと」の記述中「さもあるべき事にや」の解釈について、青山学院短大の中野博雄先生から懇切な御助言をいただいた。「にや」に反語的用法は例がないようだとということで、深謝すると共に、疑問の意だとする解釈の根拠にそのことも加えたい。